

平成 22 年度 学校自己評価表 (1)

国際学院高等学校

建学の精神	「誠実」「研鑽」「慈愛」「信頼」「和睦」	重点目標	21 世紀知識基盤社会、国際社会に通用する人格の形成と学習力の育成 特別選抜 / 特別進学 / 総合進学 / 食物調理の各コースの生徒に応じた教育の実践 地域に愛され、地域に育まれる学校を目指した、「地域貢献活動」の積極的な展開
教育方針	「礼をつくし、場を清め、時を守る」		

評価項目	行動目標	具体的方策	評価指標	難易度	中間評価	後期への改善方策	最終評価	目標の達成状況	次年度への改善方策	担当分掌
学習指導	主体的学習習慣の確立	チャイム授業を定着させる。 教師はチャイム前に職員室を出て教室で生徒と共にチャイムを聞くようにする。	チャイム授業が定着できた。	A	B	ほとんどの教員がチャイム前に職員室を出て、教室に向かっていている状況である。 授業準備を徹底させる。	B	ほとんどの教員がチャイム前に職員室を出て、教室に向かっていている状況である。 生徒の意識も向上の方向であるが、授業準備ができていない生徒が若干みられる	年度初めに、新たに生徒・教職員に周知し、授業準備も事前(休み時間)に行うことができるように徹底する。	教務
		定期的に課題を出し、家庭学習の習慣を身につけさせる。	1日1時間以上の家庭学習の習慣が身についた。	B	B	各教科主任会議に 10/1 より、各科で必ず小テストの実施とそれに伴う課題を出すことの徹底を図った。	B	全ての授業での実施状況の確認ができなかった。	全ての教科で、毎週小テストを実施。それに伴う学習(家庭)の確認を必ず行う。また、テスト内容を 100 点を取るまで、最後まで実施する。	
		授業を公開し他教科の授業法や教材の提示の仕方の研究をする。	他教科の授業方法の研究(公開授業、研究授業)ができた。	B	B	各教科において、週単位で実施できるよう計画の策定を依頼する。	B	一部のみの実施となってしまった。	期間を設定し、各期 1 回の実施ができるようにする。(全ての教科)	
		授業アンケートの周知を事前に行い、全教員が趣旨を理解した上で実施する。 集計結果を教科会議で検討し、更なる改善を押し進める。	授業アンケートの集計結果を基に教科会議などで授業改善のための情報交換が進められ、分かる授業の実践ができた。	B	A	進度の調整、内容の向上に向けた意見交換を随時実施する	A	アンケートの結果を踏まえ、各教科で会議を設け情報交換ができた。 それぞれの教科内での進度、内容の意見交換ができ、シラバスに基づいた進行状況が確認できた。	アンケートの集計表を冊子等にまとめ、教科以外の情報を理解するとともに、研究授業の実施の際、活用していく。	
生徒指導	建学の精神のもと「人づくり」教育の推進	通常の学校生活および登下校時で校則違反等「チェックカード」を用いて指導の徹底を図る。	頭髪服装および携帯電話等で指導を受けた生徒がいなかった。	A	C	頭髪服装違反および携帯電話使用違反、違反物持込が多かった。『段階的指導』の徹底を図る。	B	頭髪服装違反は、継続指導が必要となった。携帯電話使用違反、違反物持込も同様であった。	『段階的指導』を実施する。改善が見込まれない場合は、「保護者召喚」および「特別指導」等やむなしと考える。	生徒指導
		欠席・遅刻・早退の指導の徹底を図る。(行事等の場合、理由が明確となるものを提出させる)	欠席・遅刻・早退生徒がいなかった。	A	C	一部の生徒だが、依然として欠席・遅刻が目立った。早急に、該当生徒および保護者を召喚し対策を講じる。	B	「早朝指導」「指導日誌」等、『段階的指導』の効果が見られ、減少傾向となった。	「ノー遅刻 DAY」を検討している。また、月 3~5 回(欠席・遅刻・早退含む)で、「早朝指導」とする。	
		「チャイム授業」「巡回指導」の徹底を図る。 模範となる行動「誉カード」を用い学ぶ姿勢を身につけさせる。	学習環境・学習習慣・学習態度の学ぶ姿勢が身についた。	A	B	「チャイム授業」はできてきている。「誉カード」を使用し、学習成果および学校生活全般の向上を図る。	B	「チャイム授業」が定着しつつある。「誉カード」2262 枚(458 名)と継続指導することにより、一定の成果が見られた。	「チャイム授業」「誉カード」の徹底を図り、真面目に学校生活に取り組んでいる生徒を支援し、他の生徒の刺激になればと考えている。	

平成 22 年度 学校自己評価表 (2)

国際学院高等学校

評価項目	行動目標	具体的方策	評価指標	難易度	中間評価	後期への改善方策	最終評価	目標の達成状況	次年度への改善方策	担当分掌
生徒指導		積極的に全教職員が挨拶・言葉遣いに留意し、その重要性が浸透するよう指導の徹底を図る。	挨拶・言動がきちんとできた。	B	B	挨拶は、部活生を中心に大変よくなってきている。言動は、長期的な(礼儀作法を身に付けさせる)指導を図る。	A	「あいさつ運動」の推進をしており、大半の生徒ができるようになった。言動については、『段階的指導』が必要となった。	「あいさつ運動」の推進を全教職員が見本となり、生徒に浸透させる。今年度同様、継続指導とする。	生徒指導
		自転車通学者のステッカー・装備・雨合羽着用の指導の徹底を図る。登下校時のルール・マナーの指導の徹底を図る。	自転車乗車マナー等、雨合羽の着用品ができた。スクールバス乗車マナー・ルールが守れた。	B	B	雨合羽着用等は改善されてきている。マナーは守れていないため、講習会を講じる。時間遅れ、奥につめて乗車しない生徒がいる。登下校指導の強化を図る。	B	改善傾向ではあるが、安全を第一と考え、「校門指導」「登下校指導」の継続が必要となった。「忘れ物」「時間厳守」は改善されていない。「スクールバス指導」の継続が必要となった。	自転車点検は年2回実施を検討している。また、全教職員で「校門指導」「登下校指導」を実施する。今年同様、「登下校指導」「スクールバス指導」の継続を図り、「忘れ物」「時間厳守」を呼びかける。	
		清掃活動の推進を図る。環境美化の推進を図る。	全生徒が真剣に清掃活動を行った。器物破損等がなかった。	B	B	担当区域の清掃ができるようになった。また、食堂利用もよく、苦情はない。継続して様子を見ていきたい。	B	担当区域の清掃の徹底は、生徒全員に浸透しつつある。しかしながら、「机の整理整頓」「ゴミの分別」は、今ひとつであった。	今年同様、「机の整理整頓」「ゴミの分別」は継続指導とし、黒板もきれいにする。窓の開閉、電気を消すこともできるように呼びかける。	
		学年・保護者・保健室・バスドライバー・他校・警察との情報交換を行い、指導の徹底を図る。	各機関などとの連携が取れ、生徒に効果的な指導ができた。	B	B	各機関との連携は取れている。問題行動に対しても、早急に指導できている。	A	問題行動に対しての指導は、『段階的指導』および『ケースバイケース』によって指導ができるようになった。	問題行動が発生する前に指導を行い、各機関との連携を図りながら、万全を期す。	
進路指導	進路学力の向上と、生徒の希望進路実現	進路ガイダンスを充実させ、進路意識を高める。全教職員で情報を共有し、進路指導部全体で各学年の進路行事に取り組む。生徒個々の成績、進路希望等を管理し、各学年の進路指導を支援する。	生徒の進路希望を実現し、進路実績が向上した。	A	B	第3学年の大学進学をかなえるために、積極的に面接指導、小論文指導を支援していく。各学年で志望校検討会を実施し、進路実績向上のための方策を探る。各学年と進路指導部で進路の情報を共有し、進路指導にあたる。	B	進路決定率は95.7%であった。進路実績については、大学進学率が64.9%であり、国公立大学3名、難関私立大学10名の合格者を出すことができた。	国公立大学の合格者を増やすためには、特に2年生の文系は数学、理系は国語を重点的に指導をしていく。現役進路決定及び大学進学率をさらに向上させていくためには、第1学年から大学進学に対する意識を高め、学力の面からは自信をつけさせていくことが必要である。そのため、大学の情報などを適切な時期に生徒保護者に伝えていくようにする。	進路指導
		授業、放課後講習、長期休業講習を一体化させた指導ができるように、教科に働きかけていく。校外模試の事前・事後指導を徹底する。	校外模試の成績が向上した。	A	C	教務部と連携し、生徒の家庭学習を促進する。放課後講習の模試対策について、直前に集中的に行うなどして偏差値の向上を目指す。	B	特選、特進クラスについて、成績が向上した生徒もいるが、全体的にはもう一歩である。総合進学コース、食物調理コースは成績下位の生徒が減少した。	校外模試の直前で行う講習の効果があつたので、来年度はさらに計画的に集中的な対策を行っていく。	

難易度 A = かなり難しい。 B = 標準的な難易度。 C = 比較的易しい。
 評価基準 A = 十分達成できた。 B = 概ね達成できた。 C = あまり達成できなかった。 D = 目標設定を見直す必要がある。